

早期母子接触をスタンダードケアとする強いエビデンス

母親と出生直後の新生児との肌と肌のふれ合い（早期母子接触）は、新しい家族としてのより良いスタートをもたらし、重要な健康アウトカムを改善することが、最新のアップデートされたコクランレビューにより示されています。

このレビューでは、出生後 1 時間以内に母親と早期母子接触（immediate or early skin-to-skin contact）を行った乳児は、完全母乳による育児、体温の保持や血糖値の維持など、様々な利益を受ける可能性が高いことが明らかになりました。母親への潜在的な効果（出血量や胎盤娩出時期など）についても検証されましたが、そのエビデンスは不確実でした。

早期母子接触（immediate or early skin-to-skin contact）とは、出産直後に母親の胸の肌の上で、生まれたばかりの裸の新生児を抱くことです。このシンプルな実践は、新生児が子宮外での生活に適応するのを助け、体温を保ち、ストレスや泣きを減らし、呼吸や心拍数といった生命維持機能を安定させます。

早期母子接触（immediate or early skin-to-skin contact）を支持するエビデンスは極めて強固であるため、著者らは現在、早期母子接触（immediate or early skin-to-skin contact）を提供しないことを対照群とするランダム化比較試験の実施を推奨していません。

新生児にとっての明らかな利点

このレビューは、世界保健機関（WHO）の勧告

（<https://iris.who.int/server/api/core/bitstreams/601a8af5-0919-4ffb-a11d-fb534d96ed03/content>）を含む 20 の国際ガイドラインの根拠となった 2016 年に更新されたレビューを基に作成されています。最新のアップデート版では 26 件の新規研究が追加され、合計 69 件の試験（7,000 組以上の母子のペアを対象）が対象となっています。これらの試験の大半は高所得国で実施されていました。

結果によると、出産後 1 時間以内に早期母子接触（immediate or early skin-to-skin contact）を行った母親は、生後 6 か月間の完全母乳育児を続ける可能性が高いことが分かりました。完全母乳育児は、母親、新生児、ヘルスケアシステムに多くの健康上の利点をもたらします。

生後 1 か月時点で完全母乳育児の継続割合について、早期母子接触（immediate or early skin-to-skin contact）を受けたグループの乳児は約 75%であったことに対し、早期母子接触（immediate or early skin-to-skin contact）を受けなかったグループの乳児では 55%であることが報告されました。この他、新生児は、血糖値、体温、呼吸、心拍数がより最適な状態となる利点もレビューの結果に示されています。

ガイドラインでは、出生直後から最初の授乳が終わるまでの間に、中断することのない早期母子接触（immediate or early skin-to-skin contact）を実施することが推奨されているにも

かわらず、多くのヘルスケアシステムでは依然としてこの期間に母親と新生児の分離を行っています。

「これまで、新生児は出生直後に身体検査、体重測定、沐浴などのルーチンケアのために、母親から離され、早期母子接触（immediate or early skin-to-skin contact）が妨げられてきました」と、バンダービルト大学看護学部を退職した筆頭著者エリザベス・ムーア氏は述べている。「質の高い医療が広く提供されている国々でさえ、この無料で容易に実施できる介入はスタンダードケアとはなっていません」

母子分離はもはやエシカルではない

重要なこととして、このレビューは、早期母子接触（immediate or early skin-to-skin contact）と「通常のケア」を比較するさらなるランダム化比較試験はもはや倫理的ではないことを強調しています。

研究結果は、出生直後の早期母子接触（immediate or early skin-to-skin contact）を世界的なスタンダードケアとする十分なエビデンスが得られたことを示しています。WHO が、すでに早期母子接触（immediate or early skin-to-skin contact）をスタンダードケアとして推奨していることから、レビューの著者らは母親と新生児を分離する群へランダム割付を行い検証することは、もはや正当化できないと主張しています。

「現在では、早期母子接触（immediate or early skin-to-skin contact）を控えることは非倫理的と見なされるでしょう。この実践が新生児の健康と生存率を改善することを示す十分なエビデンスがあるからです」と、責任著者でありヘルシーチルドレンプロジェクト母乳育児センターのエグゼクティブディレクター兼主任教員であるカリン・キャドウェル氏は述べています。「今回のレビュー対象研究は生存率を主眼としていなかったものの、資源の乏しい環境における他の研究では、低出生体重児において早期母子接触（immediate or early skin-to-skin contact）が生死を分けることが示されています。インドとアフリカの病院で実施予定だった大規模試験では、予備データにより、早期母子接触（immediate or early skin-to-skin contact）が生存率を著しく改善することを示したため、研究参加者の募集が中止されました（<https://www.nejm.org/doi/full/10.1056/NEJMoa2026486>）」

本レビューに含まれる研究は、複数の大陸の高所得国および中所得国で実施されたが、低所得国での研究は含まれていませんでした。著者らは、今後の研究では、介入そのものの検証よりも、研究の質向上と臨床実践への実装を優先すべきであると指摘しています。

--END--

Notes to editors:

‘Immediate or early skin-to-skin contact for mothers and their healthy newborn infants’ will be published in the *Cochrane Database of Systematic Reviews*. It will be available at the following url: <https://www.cochranelibrary.com/cdsr/doi/10.1002/14651858.CD003519.pub5>

For further information, please contact:

Mia Parkinson, Cochrane

mparkinson@cochrane.org or press@cochrane.org, +44 20 4591 8310